
west sea side sunset

夕焼け

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

w e s t s e a s i d e s u n s e t

【Nコード】

N 4 2 1 1 C

【作者名】

夕焼け

【あらすじ】

僕の知らないルールの、僕の知らないゲームが、僕の知らない場所ですでに始まっていた。問題は、その賭けに使用されるコインが僕にとって非常に大切なものだということだ。

west sea side sunset 1

午後7時過ぎ、僕は書類の整理を終え会社を出る。

6月の終わりのこの季節、

太陽が死の間際にこの街に託した希望の様な明るみがほんのわずかに西の空に見て取れる。

西。

いい方角だ。

僕は西海岸について思いを巡らす。

もちろんこの街の西じゃない。

この街の西に海岸は無い。

僕が言っているのは

サンフランシスコの事だ。

ウエストシーサイド。

僕はビーチボーイズの曲のメロディーを思い出し、

その曲の名前を思い出そうとする。

なんだったかな。

まあいい。

とにかく素敵なおメロディーだ。

もうすぐ夏が来る。

いや、厳密に言えばもうすでに夏の兆候は現れている。

それは4月の風の中に。

5月の雨の中に。

僕は多くの場合、

夕食時を洒落過ぎていないバーで過ごす事になっている。

この街に来てもう8年になるから、それなりのバーをすでに幾つか知っている。

基本的にはどれも会社から西にある。

西が好きなのだ。

そう、ウェストシーサイド。

今日もその中でもわりとよく行く店に行く事にする。

遠くもなく、近過ぎもしない。

近過ぎるのは駄目だ。

僕には太陽の残した希望の欠片を、

その消えゆく様をきちんと見届ける義務がある。

僕は今まで多くの消えゆく様を見届けててきた。

知人の死にゆく様、家族の死にゆく様、そして街が死にゆく様。

死はやはり悲しいものだ。

死はあらゆる可能性の終わりを意味する。

そして同時に「あらゆる可能性は終わる」という事実を、
残された全てのものに深く刻み込む。

僕は失われたもの達について考える。

今日の夕焼けは、それについて考える事を僕に要求している。

それについて、とても深く考える事を。

バーに着いた。

夕日はもうきちんと沈んでいる。

いくらかの痕跡はこの街にもうしばらくは残る事になるが、

それは僕の見届けるべきものではない。

僕に必要なのは、夕焼けの意思のようなものを見届けるという事なのだ。

僕はここでもやはり街が見渡せる西側の席を選ぶ。
特にどの席と決めているわけではないが、
とにかく西側じゃなければ駄目だ。

これは何かしら運命のようなものなんだと思う。
或いは奇跡と呼ぶべきものかもしれない。

このバーは確かにそれほど人気があるわけじゃないけど、
今の時間帯はそれなりに客も入る。

だが、僕がこのバーに来る時、

いつも西側の席が最低一つは空いているのだ。

他の3辺にある客席が全て埋まっても、

何故か西側の1列のどこかにだけその空白はある。

今日もまた唯一にして確固たる空白が僕を迎えてくれる。

僕は席に腰を下ろし、ビールとオムライスを注文する。

何かの本に書いてあった事なのだが、

質のいいバーというのはうまいサンドイッチとうまいオムライスを
出す。

その事について僕は1つの異論も無く賛成している。

「ねえあんた、ちょっといいかい？」

不意に僕の右隣に座っていた男が早口に言う。

誰に言っているのか分からないので無視をする事にする。

「おい、あんた、あんただよ。

こらこっちを見る」

男はそういいながら僕の肩を傲慢に掴み、謙虚に揺すった。

「なんですか？」

見ると、まるで太陽のように丸く、赤い顔をした男がこっちを睨んでいる。

飽和出来る限りの汗を吸い込んだ安っぽいグレーの背広は太った男特有の匂いを放ち、

その上に乗った顔は今日の暑さのせいだけとは思えない程にぐっしょりと汗ばんでいる。

申し訳程度に残った前髪も、そこから退去する事になるのは遠い未来の話じゃないだろう。

「あんた、さつきさ、

本当はしなきゃいけないことがあったのに、

それを何事も無かったかのように放棄しただろ」

男はまくし立てるような口調で言う。

きつとそういうしゃべり方が癖なんだろう。

「しなきゃいけないこと？」

男は一体何を言っているのだろう。

「あんた、ここに入る前、

すごく重要な使命があったんじゃないか？」

ふむ、と僕は言う。

「分からないな、何の事だろう」

男はそれを聞いてさらに憤慨する。

「あんな、こんな事言いたくないが、三分前の出来事も思い出せないほどの記憶障害でも患ってるのか？それとも俺を馬鹿にしてるのか？

まあいい、面倒くさいが説明してやる。

あんな、ここに入る前、

夕日を見てある考えが浮かんだはずだ。

浮かんだはずなんだ。

それは、失われたものについて、深く考える、という事だ。そうする事が必要だと感じたはずなんだ！」

男はほとんど息継ぎもせず言い切ると

テーブルにばん！と汗ばんだ手を突いて立ち上がり、

そしてぶるぶるとその興奮を持て余し、

結局またその太った体を揺らしながらゆっくりと座った。

その椅子とテーブルに僕は少し同情した。

まだ何か言いたそうだったが、

言うべき言葉を意識の壺からうまく絡め取る事が出来ないでいると
いった感じた。

「そういえば、そんな事を考えていた気もします。
でもそれが何故あなたに分かるんだろう？」

素直な疑問だ。

なぜ、この男に分かるんだろう？

「何故？何故だと？
そこじゃないだろ？

俺が言つた事をよく思い出せ。

何故俺にあんたの考えた事が分かつたのかなんて、
俺が今言つた事に比べたらそりゃあもうどうでもいいことだ。
あのなあ、大事な事とそうじゃない事の区別くらいつくだろ？
そんな事から俺はあんたに説明しなきゃいかんのか？」

男はせっかく整えた呼吸をまたすぐに乱す。

「すみません」

謝つてみた。

男は謝つた僕を見て、はあ、と気の抜けたため息を一つついた。
少し効果があつたみたいだ。

この男は一体何者なんだろう。

「OK、あんたを責める前に、
まず俺が先に名乗るべきだったな。

あんたには今何が起こっているのか分からないんだものな。すまん。
俺は、おれは、えーと、あー、
なんだっけな」

「夕焼け」

と僕は言つてみた。

「そう、それだ夕焼け。それが俺の名前だ。俺は夕焼け。」

で、あんたは？

あ、いや、いい。

あんたは名乗らなくて結構。

それは必要の無い情報だ。

それを俺が知っていても知らなくても、

あらゆる利益と損益にどんな種類の変化もない。

その情報はあんたの利益、俺の利益、

そしてあんたの損益、俺の損益にはならないってことだな。

利益と損益のバランスを考える事は非常に重要だ。

損益ばかりでは自分の首が回らなくなっちまうし、

利益だけ求めたらいつか誰かに、ばきつとやられちまう。

人は誰かの不当な利益を許せないもんだ。

だからそのバランスをいつも考えてなきゃいけない。

それを怠ると、

利益ばっかか損益ばっかになっちまうと

それがどっちであれ不幸が待ってるぜ。

で、あんた名前は？」

僕は少し呆気にとられ、状況を見失う。

この場合は名乗るべきなのだろうが、

状況を進めるために名乗るべきなのだろう。

僕は自分の名前を言う。

「へえ、いい名前じゃないか。」

うん、いい名だ。

せいぜい親に感謝するんだな。

じゃあ、なんて呼べばいい？

ふむ、んー、

まあ、あんたでいいか。

これからもあんたって呼ばせてもらうよ。」

僕は頷く。

「で、そんな素敵な名前の持ち主であるあんたがさっき考えようと
して中断しちゃった、

失われてしまったものについての考察をほんの少しばかりお手伝い
するために、

俺ははるばる遠いところからやって来た。

どこから来たのかなんて下らない質問するなよ？

そんなのはさっき言ったチョーどうでもいい事の内の一つだ。

あんたは失われたものについて、

きちんとした知識を身につけなきゃいけない。

そうしなければあんた、本当に不幸な目に遭っちまう事になる。

それこそさっき言った、利益損益の話の比じゃないぜ？」

僕は沈黙し、彼の次の言葉を待つ。

「ん？なんだ、知りたくないのか？

あんた勘違いしない方がいい。

俺は好意であんたにそれを教えに来たんだ。

そんな態度じゃとても教えてやる気になれないな。

どうだ？聞きたいのか？聞きたくないのか？

どうなんだ？」

どうやら僕に「聞きたい」と言っただけらしい。
しかしこれはどう好意的に見ても厄介な状況だ。
なるべくなら厄介な事に巻き込まれたくは無い。
そんなことを考えていると男は今度は急に弱気になった。

「ああ、ごめん。悪かった。
俺が悪かったよ。」

そっぴゃあ、別にあんたが悪いわけじゃないんだ。
それにあんた、まだ「事」の内容もその重大さも分かってない
んだものな。

そんなあんたを責めるような言い方をしちゃった。
すまん。

でもな、あんただってもう少し言い方があるだろう？
そんな突き放す言い方しなくてもいいじゃないか。
少なくともあんたと俺はこれからしばらく、
お互いの未来の為に行動を共にする事になるんだから」

僕の言い方？

僕は何かを言っただけかな？

言い方云々の前に発言自体ほとんどしてない気がするけれど。

「なあ、聞いてるのか？」

謝ってるんだからもういいだろ？

こっちを見てくれ。

俺を見るんだ。

ほれ、見ろ。

よく見ろ。

何かを感じないか？」

ふむ

「いえ、特には何も感じません」

「なんだって？何も感じない？

あんた、分かつてる人間じゃないのか？

はあ、通りで。

そうか、あんたにはそこから説明しなきゃなんないんだな。

OK、俺達に時間は多く与えられていないけど、

まあいいだろう、これは説明しておかなければならない事だもんな。

うん、そうする事が必要だ。

俺は」

そこまで言って彼は一旦言葉を区切った。

沈黙。

それは、まるで氷河期のマンモスがその意地と名誉にかけて踏み固めた永遠に解けることを知らない氷のような、そんな種類の密度を持った沈黙だった。

もちろん僕なんかにはそんな、途方も無く理不尽な密度を持つ沈黙を破る事は出来ない。

その傲慢で高圧的な沈黙の中、

彼は彼自身が作り出した圧力を、あらゆる力学的法則の根源からを無視し、

ゆっくりとした動作で両手を真横に広げる。

一つの伝説の始まりから終わりまでがその動作に内包されているようだった。

「俺は妖精なんだ」

沈黙がぐにやりとその形を変える。

ビッグバンによって途方も無い広さまで広がった宇宙がある地点で一気に収束するような、

そんな種類の变化だ。

僕がどんな言葉を頭に思い浮かべても、

それは全てブラックホールに吸い込まれてしまう。

「どうだ、驚いたか？」

驚いたろう。

今時妖精なんてそう滅多に見れるもんじゃないもんな。

せいぜいもうちょい郊外に行かないと、

こんな都会じゃ妖精に出会うような機会なんて普通そんなにないもんな。

よし、じゃあそんな妖精と初めて出会ったあんたの質問に、

俺様が特別に答えてやる。

さあ、なんでも聞いてくれ」

僕はブラックホールの”へり”にぎりぎりこびり付いた一つの質問を引っぺがし、

ほこりを払ってから彼に投げかける。

「今時の妖精はグレーの背広を着て、バーで夕食をとるものなんですか？」

彼は、はあ、っとため息を付き、

やれやれ、というように頭を2、3度横に振る。

「あんななあ、妖精を何だと思ってるんだ？俺達にだって食べるもんが必要だし、寝るところが必要だし、セックスだってする。もちろんそれをする為には金を稼がにゃならん。実に面倒な世の中だよ。」

でもな、

不満を言ったところで国が俺達に援助金を出してくれるわけじゃないし、

不思議な声が天から聞こえてきて、
あなたは妖精なのですね？じゃあ妖精であるあなたに、
食べ物と寝る所と性欲を処理する為の魅惑的な女性を授けましょう
ってな具合になる訳でもない。

じゃあどうするか？そう、働くんだよ。

働き蟻のように朝から晩まで身を粉にしてせっせと働く。

もちろん背広を着ないでいい仕事をしている妖精もいるし、
バーなんかで飯を食わずに、フランス料理屋で夕食を食べる妖精も
いるし、

コンビニ弁当で済ます妖精もいる。

でも俺は違う。

背広を着なきゃいけない仕事をしてるし、

何の仕事かは言えないけどとにかく背広を着ない事には仕事にならない。

そして仕事の後にゃこんなバーで夕食を食う。

まあ、そんな訳だ。

なんか文句あるかい？」

「いえ、特に」

もちろん僕は今まで1度も妖精なんて言うものを見たことは無いから、

彼の言う事が本当なのか、嘘なのかを僕に判断する事は出来ない。

パツと見の印象からすれば論ずるまでも無い事だが、

なんせ彼は僕がこの店に入る直前に考えていた事を言い当ててしまった。

その事が僕にもたらす混乱は、この場面においてもその効力を発揮している。

いや、それだけじゃない。

不吉な警笛がどこかで鳴っている。

僕に向けられた警笛か、それ以外の何かに対して向けられた警笛かは分からないけど、

とにかくそれはけたたましく鳴っている。

「で、あんた、あんたの失ったもの。

その中にもう一つ追加しなきゃならんものがあるんだ。

本当に残念な事になってしまったとは思うけど、

どうか俺を恨まないでくれ。

こればかりは俺にはどうしてやる事も出来ないんだ。

あんたのガールフレンド、あれ、名前なんつつたつけ？

あの乳がでかい女だ。

うーん、名前が出てこないな」

空気が一層強張る。

不吉な警笛はまだどこかで鳴っている。そう遠くは無い。

その硬質な音は僕のあらゆる感情をあらゆる方向に、無造作に引っ張り上げる。

彼が作り出したこの特殊な質量の空間に、僕は無理やりリアリティーを引きずり込む。そうする必要がある。

「彼女に何かしたんですか？」

僕の声はとても僕のものとは思えないような、

まるで拡声器によって拡大された音を正しくない方法で無理やり縮尺したような、

そんな響き方をした。

しかしそこに込められた感情は、

今の僕にしては上出来なくらいにリアルなものだった。

「いや、話は最後まで聞け！」

俺の言葉選びはいつも冗長だが、どれもあんたを思つての言葉なんだ。

そこは分かってくれよ。な？

確かにあんたの大事なガールフレンドの身にあることが起こった。

だがそれは俺のせいじゃないし、

その事自体には俺は全く関わってもいない。

あんたがあんたの事を思つてここで俺に怒りを向けるのも分かる。

でも俺のせいじゃない事を俺に対してあんなに責めても、

俺にはどうしてやる事も出来ないし、

あんなに納得のいく結末へはたどり着けない。

そこんところを分かってくれよ」

僕は僕の中に巻き起こる感情を、一つ一つあるべき場所に収めていく。

もちろんどれをいっどんな形で引つ張り出す事になってもいいように、

そのどれもに印と手綱をつけておく。

「あんたのガールフレンドは今眠っている。

肉体的に障害が発生したわけじゃない。

体は至って健康だ。それは安心していい。

目を覚まさせる事さえ出来れば、

あんたはまたいつでもあの綺麗な体を抱く事が出来るわけだ。

ただ、これがすごく厄介な問題なんだ。

目を覚まさせる事が出来るのか。

それはあんたと俺にかかっている。

いや、厳密に言えばあんた一人にかかっている。

俺はそれを補佐する役目さ。

もちろん眠ったままの彼女をそのまま放置しといたら、

あっという間に死んじまう。

だからきちんと病院に運んでおいた。

俺はあんたの補佐だからな。

補佐の仕事第一号としてすでに運んでおいたぜ。

あんたたちのすぐ近くにでっかい病院あったろ？

あそこだ。あそこに彼女はいる。いや、あるというべきかな？

彼女の肉体はそこにある。

今日はもう面会は無理だが、明日にでも行ってやるといい。

まあ、彼女の核はそこには無いわけだが」

僕の混乱は加速度的にひどくなる。

本来ならこんな話に信憑性など1つも感じないのだが、
今、ここにおいては、全てが真実なのだ。

僕ははつきりと感じる事が出来る。

彼女が深い眠りの中で、

何かに対して誰かが便宜的につけた名前を呼んでいることを。

それは多分僕の名前だろう。

彼女は僕を待っている。

「僕はどうすればいい？」

彼は眉を八の字にして哀れむような目で僕を見て一呼吸し、

それから、哀れみを目に称えたまま口元だけ優しい笑みを作った。

「あんたにはしてもらわなきゃならない事がいくつかある。

こんな事になっちまって、ほんと難儀だと思うし、

でもそれでも、それを堪えてしなきゃいけない事があるなんて本当に辛い事だ。

だから俺はあんたを全力で補佐する。

それが俺の仕事だし、俺の望む道だ。

だがまずは、明日の朝だ。

明日の朝病院に行つてやれ。

話はそれからだ。

こんな状況で、そんな気持ちで今日の残りを過ごすのは辛いだろうけど、

でもきちんと準備をして、心を決めて挑むんだ。

彼女を愛してるんだろ？」

「うん」

「まあ、こんなもんじゃ心は晴れないだろうけど、

今この場で俺がしてやれるせめてもの事だ。
ここで一番上等なウィスキーを一杯奢ろう」

僕はウィスキーをロックでグラス一杯飲み干し、バーを出る。
彼とは明日の朝、病院で落ち合う約束をして別れた。

僕は帰る途中駅で彼女に電話をかけてみたが、やはり彼女は電話に出なかった。

朝六時に僕は目を覚ます。

いつも通りの朝六時。

僕はなるべくいつも寝る時間を一定に保っているので、目覚ましをかけなくても自然に六時に目覚める事ができる。

空は実に素直に晴れ渡っていたし、

朝としては悪くない朝だったが気分は最悪だった。

もちろん昨日の出来事のせいだ。

彼女は無事なのだろうか。

きっと彼が言ったように、肉体的には無事なのだろう。

しかし彼女は今、致命的な欠落をしている。

僕はその欠落した部分があるべき場所に戻す為にこれから彼女に会い、

そして彼に会う。

夕焼けという名の男に。

夏が近い事と、もう一つの理由によって僕は寝ている間に普段より多くの汗をかいていたので、シャワーを浴びてその汗を洗い流す。幾らか気分は晴れた気がしたが、そんなものはふかふかのソファ―に誰かが軽く指でつけた窪みと同じだ。

すぐにそれは元に戻るための運動を開始し、あっという間に元に戻ってしまう。

僕はソファ―に対して、そしてソファ―に窪みをつけた指に対して、

幾らかずつの同情をする。

シャワーからあがった僕はりんごを一つ、軽く洗って齧る。
しゃりしゃりと口の中で心地のよい音がこだまするが、
僕にはその確固たる音よりも、これから起こるであろうことに対する、

漠然とした不安の方がリアルなものに感じられた。

りんごを食べながら、

僕は今日着ていくべき服について考える。

今日はきつとハードな1日になる。

でもその前に彼女に会うのだ。

意識は無いとはいえ、それなりの格好をしていく必要がある。

僕はりんごを食べ終える。

クローゼットから薄茶色のシックなシャツと、

リーヴァイスのホワイトデニムを取り出す。

どちらも彼女と二人で買いに行ったものだ。

僕は彼女の素敵な笑顔を思い出す。

着替え終わった僕は居間に戻り、会社に電話をした。

昨日の夜、母親が倒れ危険な状態になった為何日か休みが欲しい、
と僕が言つと電話の向こうの上司は、「有給も十分に残ってるし、
状況が落ち着くまで休んでいいよ」と、いつになく優しい声で僕に
言った。

すみません、ご迷惑をお掛けします。

どの程度かかるか分かり次第追って連絡致します。

と言い僕は電話を切った。

僕は今まで休日以外に休みを取る事もなかったし、忙しい時期であれば休日も返上して仕事をしてきた。仕事自体も出来る限り迅速に、丁寧にきちんとこなしてきた。なので唐突な休みを取る事も難しい事ではなかった。

僕は電話帳を引っ張り出し、もう一つの架けるべき電話番号をその中から探す。

「はい、。。病院受付です」

電話の向こうの男性が眠そうな声で言う。

「すみません、そちらの病院の面会時間は何時からですか？」

「当院へ入院中の患者様へのご面会は１１時からとなっております。ご来院の際、ナースステーションへ声をお掛けください」

「わかりました、どうも」

「がちゃん。と電話の向こうの相手が電話を切る。

夜間受付のバイトの大学生かなんかだろう。

彼の発する言葉はどれもマニュアル通りの適切な言葉だったが、言い方は実に投げやりなものだった。

１１時までまだ３時間近くある。

僕は居間のソファに腰を下ろし、目を閉じる。

僕は彼女について考える。

そして次に僕は彼女の「大事な部分」が欠落してしまった肉体について考える。

何も無い部屋で青白い光を放つ非現実的なソファー。

彼女はそこに腰掛けている。

僕は彼女にゆっくりと歩み寄り、静かな交わりを持つ。
魂を欠いた彼女の肉体と。

僕は彼女の耳に口付けをし、

首筋にキスをし、

次に乳房にキスをする。

そして小さなへそにも。

そこで彼女はゆっくりと首を僕の方に傾ける。

肩に掛かっていた髪が僕を目掛けて緩やかに、静かに垂れ下がる。
魂を失くしたはずの彼女の口元がささやくように言う。

「ねえ、あなたをずっと愛していたのよ。

それは本当。

今だって愛してる。

あなたを、そしてあなたの街を。

あなたの周りにある全てのものを。

そしてあなたが私を深く愛してくれている事も分かっている。

あなたは本当に、本当に深く私を愛している。

でも、私にはまだ行かなければいけない場所があった。

あなたには悪いと思ってる。

でもね、これは私やあなただけの問題じゃないのよ」

「例えば、夕焼けさん？」

「そう、夕焼けさん。」

彼の為でもあるわ。
でも彼のせいじゃない。
彼を憎んではいけないわ」

「分かつてる」

「彼はいい人よ。
多少無駄な事を言い過ぎるけど、
悪意はまったくないわ。
ただ少し素直過ぎるだけ」

「妖精なものね」

彼女が優しく微笑む。

時間の流れが一瞬減速し、
そしてまた元通りになる。
それは認識できうる最小の単位の時間だ。

「さあ、そろそろ時間よ。
あなたなら出来るわ。」

私は今までただの一度だってあなたを疑った事はないし、
あなたはそれにいつも答えてくれて来た。
自分を信じて」

僕は彼女の魂に口付けをする。
彼女が道しるべとして残していった、
わずかな魂の欠片に。

僕はゆっくり目を開ける。

ほんの数分の出来事のようにだったが、
時計の針はもう10時半を回っていた。

僕は一番履き慣れた白いナイキのスニーカーを履き、
家を出る。

11時少し過ぎに病院に到着した。

僕はナースステーションで彼女の病室の場所を聞き、
もっとも早い道を選んでそこへたどり着く。

病室の部屋番号を確認し、静かにドアを開ける。
確かに彼女はそこにいた。

まるで死んでいるように、静かにそこに横たわっていた。

後ろ手にドアをゆっくりと閉め、
彼女に近づいて呼吸をしている事を確かめる。

大丈夫だ。

呼吸はしている。

その呼吸はとても規則的なものだったけど、
同時にとても危ういもののように感じられた。
まるで等間隔に並べられた、とても薄いガラスの管のように。

僕は彼女の髪を撫でながら、彼女の首筋を見る。

そこには僕がさっきした口付けの跡が確かに残っていた。

僕は声に出して彼女に言った。

「じゃあ、行ってくる」

振り返るとそこには夕焼けがいた。
ドアは閉まっている。

「いつからそこに？」

彼は僕から目を反らし、そして少しの間、空中にある僕には見えな
い何かを目で追ってからまた僕の目を見る。
彼が昨日とは別人のような静かな口調で言う。

「悪いと思う。」

二人きりにしてやれなくてさ。

でもこれも俺に与えられた任務のうちなんだ。
すまないね」

「いいよ」

と僕は言う。

小さく笑みを作ろうとしたが、うまくはいかなかった。
夕焼けが眉を八の字にして昨日より幾分人懐こく微笑む。

「時間がない。さあ、行こう」

「で、僕達はまず何をしたらいいんだろっ?」

病院の廊下を歩きながら僕は夕焼けに訪ねる。

「ええとね、あんたの悪いところだ。

論理的、かつ合理的な思考、行動理念は実に素晴らしいと思うが、あんたはそれを優先させる為にいつでも事を急ぎ過ぎる。よく人からそう言われないかい?」

僕はその事について少し考えてみる。

「いや、誰かにそう言われたのは初めてだよ」

「ふむ、そうか。

じゃああんた自身はどう思う?
その事について」

僕はその事についてまた少し考えてみる。

「確かに、夕焼けさんのいうとおりかも知れない。

僕は往々にして結論を急ぎ過ぎる。

でも、その事で判断を誤るほど僕は馬鹿じゃないし、
決断を誤らない程度の時間は惜しまない事にしてる。
そして間違いじゃないのなら、

結論がどんなものであれそこにたどり着くのは早い方がいいと思っ
てる」

「でも」

と夕焼けが言って立ち止まる。

「でも」

あんたいつつもそれだ。

でも、でも、でも、でも。

何にでも、「でも」。

あんたは頭の中でいつだってそう言ってる。

そしてそれが染み付いて、

必要以上に多くの場面で『でも』って言っちゃってる。

もちろん自分の主張と違う事を相手が自分に望んだ時、
きちんと相手に反論する事は必要だ。

だがね、さつきも言ったようにあんたは判断を手っ取り早く、

計算式を単純化してインスタントにしすぎちゃってる。

その単純化された計算式で通用する範囲でなら、

その判断の速さは武器になるだろうさ。

でも。

あえてここで俺は『でも』と言わせてもらっつよ。

本当に大事な問題には、そんな安易な略式の判断力は通用しないんだよ。

あんたは時として、あんたが認識出来ている事より多くのことを、
その判断の計算式に織り交ぜなきゃいけない。

特にこれからそういう場面は飛躍的に増える事になる。

少なくとも俺と一緒にいる間はね。

だからあんたはもっと慎重になるべきなんだ。

なにを判断の計算式に組み込むか、

なにを判断の計算式から除外するか。
その選択を慎重におこなった方がいい。
この事をきちんと覚えておかないと、
きつとあんたは大事なガールフレンドを永久に失うことになる。
いいね？」

相変わらずの早口だったが、昨日のような強い感情の表れは感じない。

僕は彼に対して『でも』と言ったのはそもそもこれが初めてだった気がするが、

彼の言い分そのものは素直に僕を納得させるものだった。

僕に向けた単純なアドバイスだ。

「分かった。これからは気をつけるようにするよ」

「まあ、それが分かったならこれからは俺に対して、あんまり『でも』って言わない事だ。

あんたが『でも』ってこういうべき場面はもっと後にきちんと用意されてる」

「うん」

僕が素直に彼の言う事を聞いたことで、彼は幾分機嫌を良くしたようだった。

僕達は再びエレベーターに向かって歩き出す。

「で、これからどうするのか、と聞いたね？
それは俺にも分からない。

俺達二人でこれから見つけ出さなきゃいけないんだよ」

「ちょっと待って。」

それについて夕焼けさんは何かしらの事を知っていて、それで僕を手助けしにきたんじゃないのかい？」

彼はまた立ち止まり、

やれやれ、といった風に肩をすぼめて眉を八の字にする。

「いいかいあんた、昨日も言っただろう？」

俺がいくら妖精だからって都合よく天から導きの声が聞こえてきたりなんてじゃないよ。

そんなもんが聞こえてくるなら、こんな背広来て朝から晩まで働かなくてもいい方法をまず授けてもらっよ」

彼は一つ一つの言葉に対して、大きな身振り手振りでジェスチャーを加える。

外国の映画に登場する小男が往々にしてそうするように。

「俺に分かっているのは、

何かしらの方法を用いて、あんたのガールフレンドの失われた魂を、そしてそれに付随するあらゆるものを、あるべき場所に戻さねばならないという事だけだ。

目的をきちんと遂行する為には、

目的に対してまず方法を探し、次にそれを検討し、妥当であるようなら努力を惜しまず行動に移す。

この法則はあんたら人間だって同じだろう？」

今の俺達には、現状と目的の部分しか明らかにされていないのさ。それに対する方法は俺達で見つけ出さなきゃならん。

そこで、だ。

俺達はまずここから東へ向かうべきだと思うんだ。
分かるかい？

お日様の昇る方角だ。

昔から、全てが始まるのは大抵東からって相場が決まってるんだ。

OK？」

「うん」

「時間は多く残されていないけど、
急ぎすぎて着手する順番を間違えると、より多くの時間を掛けなければならなくなる。

まあそれはともかく、そんなところに突っ立ってないでエレベーターに向かうぜ。

ぼさっとしての時間は俺達にはないはずだ」

と言って夕焼けはまた歩き出す。

歩みを止めたのは確か2度とも彼だったはずだけど、と僕は思う。
もちろん声には出さない。

彼女が言ったように彼に悪気は微塵もないのだ。

僕達はエレベーターにたどり着き、乗り込む。

「駐車場に俺の車が止めてある。

そいつを使って手っ取り早く東にあるはずの『しるし』を見つけ出そう」

エレベーターが1階に着く。

夕焼けが出て、僕が出る。

入れ違いに、いかにも不健康そうな青い顔をした若い男がエレベーター

ターに乗る。

手に見舞い品らしきものを持っていたので誰かの見舞いに来たのだろっが、

途中ですれ違った他の入院患者よりは彼のほうがよほどの場所に
お似合いだな、と僕は思った。

僕は駐車場に着き、彼の車に乗り込む。

古い黒のワゴンRだった。

彼の汗やら体臭やらが染み付いていて、むっとした匂いが車内に充満している。

6月なので窓を全開にして走行できるのが唯一の救いだ。

「どうだい、これがあんたのガールフレンドを助ける為に用意された、

俺達のレスキューモーターだ」

僕はなんて言っていないのか分からなかったので、
黙って次の言葉を待つ。

「こいつに初めて出会った時、俺はびびっときたね。
魂が呼応したんだよ」

と言い彼はハンドルを軽く叩く。

この彼にはいささか窮屈なワゴンRと彼が呼応する様を僕は想像してみた。

僕とこのワゴンR、

もしくは彼と流行りのワンボックスカーよりは、
確かに幾分似合っているように思えた。

「しかし、東に行くって言っても、

どこまで行けばいいんだろう?。」

と僕は尋ねてみる。

「そんなのは俺には分からんよ。
着いたところに行くべきところだ。

今の俺に言えることはそれだけだよ。

あ、そうだ、あんた朝飯は食べてきたかい?。」

「りんごをひとつだけ、齧って来たよ。」

「そうかい、それだけじゃ腹減っちまうだろう。
まず東に向かう前に腹ごなしをしよう。」

夕焼けの提案で近くにあったファミリーストランに入る。
そこは僕の家から最も近いところにある大手チェーンの大衆向けレストランだった。

けれど僕は基本的にこういったチェーン系のレストランを利用しない。

だからこれが初めての利用だ。

僕達が入ると、大手チェーン店の従業員とは到底思えない、
実に優雅な雰囲気を持った30前後の男が、「いらっしやいませ」
と丁寧な発声で、
完璧な角度のお辞儀をしながら言った。
もちろん優雅な笑顔もセットだ。

僕は煙草を吸わない事にしているが、夕焼けが煙草を吸いたいと言
うので喫煙席を選ぶ。

さっきの男が実に完璧なタイミングでオーダーを受けに来る。

「俺はハンバーグステーキにするよ。
あとオレンジジュース。

あんたは何にする？

腹減ってなくても、何か食べておいた方がいい。

なんせあんたにはこれから重要な任務があるんだからな」

コーヒーだけにするつもりだったが、彼の言い分にも一理ある。

「じゃあサンドイッチとコーヒーを」

「かしこまりました」

実に心地良い声のトーンだった。

「ファミリールレストランにしては随分優雅な雰囲気のお店だな。
なんだか落ち着かないよ。

俺はもつと雑然としてるところの方がいいな」

と夕焼けが言う。

僕は最初こそ面食らったが、

こういう雰囲気のファミリールレストランも悪くないな、と思う。
少しして料理が運ばれてくる。

彼が料理を並べる仕草も、やはりとても優雅だった。

「事は今日中に片付くとは限らない。

あんたもその事は覚悟しておいた方がいい」

むしゃむしゃとハンバーグステーキを食べながら夕焼けが言う。

「一応会社には何日か休みを取る許可をもらっておいたよ」

と僕が言う。

「まあ、そうだね、仕事をする上での責任もあるだろうが、それとガールフレンド、大事な方は明白なものね。

もし事が思ったようにはかどらなくて、

好ましくない立場に立たされることになったとしても、それでもあんたには今十分な時間が必要だ。

それを惜しんだらきつとあんたは一生後悔する事になるし、その後悔を企業は拭ってくれないからね」

「うん」

「それと」

と夕焼けが言う。

さっきまでと雰囲気が少し違う。

また昨日のような、空間の密度が歪められる様な感覚だ。

「あんた、この場所をきちんと覚えておいたほうがいい。記憶に『しるし』をつけるんだ。この場所という目印を。

俺達はこれから始まりの場所を目指す。

物語はもちろんそこからスタートする。

『始まりの場所』からね。

だがね、本来物語には語られる部分の他に、

大抵の場合語られるべきスタート地点の前に、

きちんと覚えておくべき種類の起点があるんだ。

それを起点として、機軸として物語のスタート位置は決められるし、

それ以降の展開にも深く関わってくる。

語られる事のない序章。

いいね、この場所を、さっきの、
名前をなんて言ったかな？

あの優雅な店員を、きちんと覚えておくんだ。
出来れば出る時にでもネームプレートを確認して、
名前を覚えておいたほうがいい。

ここはその起点となる場所だ。
それは昨日のバーでもなければ、
あの病院でもない。
ここなんだ。

あんたみたいな種類の人間は大抵その起点を、
昨日のバーと勘違いするんだ。
それこそさっき俺があんたに言った、
判断するべき材料の見間違いだ。
もちろんあのバーにもいくつかの重要なエピソードは組み込まれて
いた。

でも起点を定める時、見なきゃいけないのはそこじゃない。
その事をきつとあんたはまだうまく理解できない。
それをきちんと見極められるのが妖精ってわけさ」

彼がにやりと笑う。

僕は多分何かを言うべきなのだろう。

でも言うべき言葉は僕の手の届く範囲に存在しない。

あるいはそれが届く範囲にあったとしても、

空間の密度が不均一なせいで自分とそれとの距離を計る事が出来な

い。

そうである以上僕はためらいがちな沈黙を一つずつ暫定的に積み上げてゆくしかない。

暫定的沈黙。

「まあ、今のあなたには分からんだろう。」

とにかくここを、そしてさっきの優雅な従業員を覚えておけばいい」

「うん」

僕はやっと沈黙を破る事が出来た。

状況としては暫定的に。

行為としては決定的に。

「さて、じゃあそろそろここを出ようか。
ちんたらしてる時間は俺達にはない」

僕達は出口へ向かう。

精算の際にはまた例の優雅な男が現れる。

優雅な笑顔を携えて。

僕は彼のネームプレートを見る。
安住。

ネームプレートにはそう書かれている。

僕はその名前を忘れないように、きちんとその記憶にしろしをつけて置く。

「2681円になります」

と安住が言う。

僕は財布を取り出し、

そこから3000円を取り出す。

夕焼けは「悪いね」といいながら財布を取り出す仕草も見せない。まあいいさ。

僕は安住から319円のおつりを貰う。

彼の手渡す仕草がとても優雅だったせいで、

僕はその事に気を取られて10円玉と1円玉を何枚か床に落としてしまう。

とっさに安住がしゃがんでそれを拾い集め、僕に手渡してくれる。

「申し訳ありません」

と安住が柔らかな口調で言う。

心の籠った、それでいて大袈裟過ぎないパーフェクトな謝罪だ。

僕はいえいえ、と言う。

精算を終えて店を出る時、安住が「お氣をつけて」と僕らに向けて言った。

僕はその事に幾らか疑問を感じたが、昨日から僕の周りで起こってる出来事に比べれば、それは些細な事であるように感じられた。

そう、ファミリーレストランの従業員が去る客に「お氣をつけて」と言う事など、

それに対する違和感など今の僕にとっては実に些細な問題だ。

僕達は店を出て夕焼けのワゴンRに再び乗り込む。

そして東へ向けて走り出す。

しばらくの間夕焼けは言葉を発する事もなくひたすら車を走らせ続ける。

いくらか窮屈だけど、お似合いの運転席にその身を沈ませて。

僕は前方の景色をぼんやりと眺める。

行き交う車や、通り過ぎる信号、建物を眺め、

横断歩道を渡る人々を眺める。

それを頭の中でひとつのボウルに入れ、適度に混ぜ合わせる。
そして名前や教訓の無いただの風景がそこに出来上がる。

30分後、唐突に夕焼けが口を開く。

「なあ、あんた、ちょっと腹減らないか？」

午後2時半過ぎ、僕は相変わらず東を目指して進み続けている。
約30分置きにどこかしらのコンビニか飲食店に寄りながら。
それにしてもよく食べるな、と僕は思う。

やはり妖精となると必要な栄養の量も違うのだろうか。

しかしもう食事の時間を抜いて2時間近く走っている。
まだその始まりの場所にはたどり着かないのだろうか。
でも夕焼けに聞くわけにはいかない。
きつとまた、あんたはせつかち過ぎる、と言われるだろう。

「さてと、この辺でいいかな」

と言うと夕焼けは突然車を止めた。
ここはどこだろう。

僕の知らない交差点。僕の知らない標識。
僕の知らない風景。

「あんた、準備はいいかい？」

「準備？一体何の？」

夕焼けはオーバーに驚いた表情をして、ハンドルをぱちんと叩く。

「あんた、これだけの時間があったのに準備できてないのかい？
はあ、先が思いやられるな。」

ふむ、もう今日はあまり時間が残ってないな。
手っ取り早く済ましちまおう。
こっちだ、ついてきな」

僕達は雑居ビル街の隙間を縫っていく。
拓けてもいなければ、廃れてもない、
ごく普通のどこにでもある街だ。
夕焼けは窮屈そうにビルの隙間を歩いていく。
どこへ向かっているのだろう。

「さあ、着いた。ここだ」

夕焼けが立ち止まったのは、もう使われていない廃ビルの前だった。
バブルの勢いで建ててみたけれど、建てた直後にバブルが弾けて維持できなくなったというような、そういったくたびれ方をしたビルだった。

建物自体は比較的新しくて綺麗だし、作りも悪くない。
だが致命的なまでに建物としての生命は衰弱しきっている。
そんな疲弊の色が、まだ新しい壁面にべったりとこびりついている。

「見て分かるとおり、
バブル全盛の頃にどっかの社長が調子に乗って建てたけど、
すぐにバブルが崩壊して僅か半年でその役目を終えちゃった哀れな
廃ビルさ。
都心からこんだけ離れてちゃ新しい買い手もつかない。
壊しちゃうのも勿体無いからって事でまだ残されてはいるけど、
正直こいつの魂はもうほぼ擦り切れちゃってる。
目的を失った建物ってのは建てて1年でも信じられないくらい老朽
化するのさ」

夕焼けの後を追うようにして僕もその廃ビルの中に入る。
中に入るとなおさらその疲弊の色は濃くなる。

「あんたは高度経済成長をその肌で感じて生きてきた世代じゃない
ものな」

階段を登りながら夕焼けが言う。

2階を通り越し、そのまま3階へと向かう。

「あの時代には2種類の人間がいた。

この波に乗って平和に豊かに一生生きてけるだろうって考えてた連
中と、

これは近いうちにまずい事になるぞって感じてた人間だ。

もちろん俺は後者だった。

あんなもんは経済の急発達した国によくある御伽話なのさ。

ブックエンド。

夢は終わる」

僕達は3階も通り過ぎる。

最後の階へ向かう。

「ふう、着いた」

と夕焼けが言う。

彼はひどく汗をかいている。

僕もさすがに少し汗をかいた。

今時の建物にしては珍しいほど急な階段だったのだ。

「ここであんたはしなくちゃいけないことがある。

そうだな、30分つてところか。
時間がないからな。

あんたが移動中に準備を怠ったせいだ。
30分で済ませてもらう。
それ以上は時間を割けない」

「僕はここで何をすればいいんだろう？」

もちろん僕には分からない。

「そんなのは俺にも分からんさ。
俺に聞かれても困るよ。

俺はあんたがここに来る事が必要だって考えたから、
ここに連れて来たまでだ。

それが俺の仕事だからな。

あんたはここで何かをする。

そして万全の準備を整える。

30分でね。

とりあえず中に入りな。

俺はこの階段で待つてる。

30分経ったら出てくるんだ。
いいね？」

「うん」

夕焼けがボタンとドアを閉める。

僕は時計を見る。3時12分。

僕は3時42分までにここで何かしらの目的を見つけてそれをこな
し、

そして準備を整えなければならない。

フロアを見渡す。

感じとしては1階とほぼ変わらない。

10畳ばかりの何もない部屋だ。

いや、窓辺に椅子が一つ置いてある。

木でできたアンティークのような椅子だ。

こんな廃墟と化したオフィスビルの4階に

何故こんな椅子があるんだろう。

僕はそれに座ってみる。

座って部屋をもう一度見渡す。

くすんだ白い天井、

くすんだ白い壁、

くすんだ白い床、

くすんだ窓。

特に変わった事はない。

目を閉じると僕の意識はまたあの青く光るソファアの置かれた部屋

へと引きずり込まれる。

彼女はいない。

僕はそのことに少しがっかりする。

そのソファアは今朝見たものと同じだけれど、

僕はそれを見てなぜかひどく懐かしい気持ちになる。

そのソファアに腰を下ろす。

椅子に座って目を閉じ、

そのイメージの中でまた腰を下ろすというのは少し不思議な気分だった。

彼女はどこへ行ってしまったのだろうか。

きつとあのドアからどこかへ向けて出て行ったのだ。
彼女の意思で。

僕はその様を想像する。
とても悲しい気持ちになる。

それは本当に、とても悲しい事なのだ。

目を閉じて目を開ける。

とても長い瞬き。

一瞬の動作がどれも永遠のように思える。

目の前に彼女が立っている。

その首筋には僕が朝つけたはずのキスの後はない。

「やあ、こんにちは」

と僕は魂を失った彼女の肉体に挨拶をする。

彼女はゆっくりとした口調で言う。

「こんにちは」

僕が知っている彼女とまったく同じ口調だったが、
でもそれは細部まで綿密に作り上げられた贋作だ。

同じ絵の具で、同じ筆で、同じキャンバスに書かれた同じ絵。
しかし同じに見えても、同じ画家が書いた絵ではない。

どれほどそれらが似ていても、

そこに込められた感情すら完璧に再現されていたとしても
そこに意味などない。

僕は彼女の魂を取り返さなくてはならない。

「ねえ、コーヒーを飲みましょう」

彼女が言う。

「いや、僕にはまだしなければならぬことがあるんだ。悪いけど君とここでコーヒーを飲むわけにはいかない」

はつきりと、丁寧と言う。

彼女は少し悲しそうな顔をする。

そこに魂はなくても、僕はやはりその悲しげな顔を見て辛い気持ちになる。

「そう、残念。

じゃあこれを持って行って。

きつと何かの役に立つわ」

そういうと彼女は手に持っていた小さな丸い石を取り出す。どこにでも転がっているような、何の変哲もない石ころだ。

ありがとう、と言って僕はそれを受け取り、じつくりと見てみる。それは灰色で平たく、ほぼ円に近い形をしている。

大きさは直径が3センチ程度。

本当にどこにでもある石だ。

「また会えるといいわね」

彼女が僅かに微笑みながらそう言う。

僕はそれには答えない。

「おい、起きろ！早く！

夕日が沈む前に帰らなきゃならないんだ！

ぐずぐずするな！」

突然夕焼けの怒鳴り声が聞こえてくる。
僕は目を開ける。

「やあ」と僕は言う。

「準備はきちんできたかい？」

「うん」

「そりゃあ良かった。

もう時間がない。

急いで街に帰るぞ」

「うん」

僕はビルを出る。

夕焼けは非常に焦った様子で足早に歩いてしたが、
彼の2歩は僕の1歩分程度だ。

でもその事に気づかれるとまた機嫌を損ねかねない。
僕も焦っている素振りですえかせかと歩く真似をする。

「さつきも言ったが夕日が沈む前に街へ帰らなければならない。
それは今日の出来事の中で何よりも重要な事だ。
俺達にはあんたらに到底理解出来ないいくつかのルールがある。
それを無視すると本当に悲惨な目に遭うことになる。
で、車はどっちに止めたっけ？」

僕は西を指す。

僕達はひたすら東を目指してきたわけだから、

きつと西にあるに違いない。

「あつた。

あんたよく分かったな。

さすがだ。

あんたも妖精になれるかもしれんな」

僕達は車に乗り、来た道を西へ向かって走り出す。

帰りの道で僕は夕焼けに、さっきの石を見せてみる。

「よし、とりあえず始まりの石を手に入れる事はできた訳だ。

きつとそれがどこかの場面であんたを助けてくれる。

肌身離さず持つてることだ」

「うん」

帰りの道でもやはり30分おきに夕焼けの腹ごなしをする事になった。

そしてその代金もちろん全て僕が支払った。

West sea side sunset 5

夕方の6時少し前に僕達は例のファミリーレストランへ到着した。
あの優雅なウェイターはまだそこにいた。

「いらつしゃいませ」

と言い、安住は素敵な笑顔で僕達を迎え入れてくれる。
僕達はまたさっきの席へ座る。

「なんとか間に合ったな。
危ないところだった。」

渋滞だろうがなんだろうが、
俺達の規則はそんなことを考慮してはくれない。
本当に厄介な規則だよ」

彼が深いため息をつく。
彼のわずかに残った前髪がエアコンの風に揺れている。
彼は一体いくつなんだろう？

少なくともバブル全盛期の日本を生きたという事は、
それなりの年齢なのだろう。

しかし彼の年齢を判断するのはたやすい事ではない。

20代の後半にも見えるし、
30代にも見える。

40代だと言われても素直に納得できる。
実に年の分かり辛い顔立ちなのだ。

「夕焼けさんはいくつなんだい？」

思い切って聞いてみる。

また怒り出すかもしれないが、そうしたら謝ればいい。

「俺の年？」

あんたそんなものが知りたいのか？

ふむ。

今日はあんたきちんと仕事をこなしたからな。

いいだろう、教えてやるよ。

俺は……ええといくつだったかな。

まあ、あんたより長く生きてる事は間違いない。

いや、多分あんたの知る誰よりも長く生きてるよ。

あんたにもし俺以外の妖精の知人がいるなら別だがね」

僕は彼の顔をよく見てみる。

言われてみれば彼の顔にはいくつもの少し特殊なしわがある。

それは年齢による老化が皮膚にもたらしたしわというより、

時代の上に時代が積み重なり、

それをいくつも重ねた事による圧力で出来た歴史の歪みのような、

そういう種類のしわであるように感じられた。

「実に色々なものを見てきたよ。

人が争う様も、愛し合う様も、そのほとんどをこの目で見てきた。

戦争にだって行ったし、会社を持っていたこともある。

違う国に住んできたこともあるし、家庭を持ったこともある。

どれも昔の話だがね。

俺達妖精は年というものを取らない。

絶対死なないわけじゃないが、基本的には死なない。

俺達が死ぬってというのは、

その存在があらゆる物理法則から必要とされなくなるって事なんだ。

そうなった時俺達は死ぬ。

個々に与えられた役目が違うから、

どういう状態が俺達の死因になるのかは誰にも分からない。

死んじまった時に周りの奴らが初めて思うのさ。

ああ、あれがあいつの死因だったんだってね。

でもそんなこともすぐに忘れる。

なんせあらゆる物理法則から必要とされないんだ。

必要のない情報は記憶からすぐに削除される。

記憶自体には刻まれてても、

必要の無い情報はほったらかしにされて埃をかぶって忘れ去られるのさ」

彼はやれやれ、といったように肩をすぼめ、眉を八の字にする。

そして彼は今日何度目かのハンバーグステーキを実につまそうに食べる。

僕は流れている曲がクロスビースティルスナツシュ&ヤングの曲である事に気づく。

それはヘルプレスだった。

ニールヤングがソロになった後のリテイクではない。

4人でやっていた頃のヘルプレス。

1969年、その年僕はまだ生まれてすらいなかった。

僕の知る1969年は全て伝説上のものだ。

しかし、そこに確かにあったのだ。

アメリカではウッドストックが開催され、

世界中の多くの人たちが一つの場所を目指した。

ラブアンドピース。

夕焼けがハンバーグステーキをむしゃむしゃと音を立てながら食べ

る。

外は丁度夕焼けの色に染まり始めている。
もうすぐ今日が終わる。

僕はコーヒーを一口飲む。

とても大手チェーンのファミリーストランで出されるコーヒーとは思えない味だった。

味に深みがある。

そして優雅な香りがする。

僕はこの場所にかつて感じた事がないほどの安らぎを覚える。

僕は1969年のラブアンドピースを知らない。

しかし、その欠片がもし現代に幾らかでも残っていて、

それにも僕が出会ったとしたら、こういう形をとって現れるのだろうか。

彼女の魂を無事呼び戻す事が出来たなら、

その時は二人でここに来よう。

いや、夕焼けと三人でもいい。

きつと悪くない。

「それで、明日と明後日なんだけどな、

休みをくれないか？

俺達妖精にだって休みは必要だ。

土日くらいゆっくり休みたいんだ」

「でも彼女の魂は？

そんな猶予はないんじゃないのかい？」

僕は聞いてみる。

「確かに猶予はない。

でもな、猶予がない事と時間がない事は別だ。

それに来週は今日よりもっとハードになる。

あんただってゆっくり出来るのは多分明日と明後日くらいさ。
だから明日と明後日は休んだ方がいい」

「彼女は大丈夫なんだね？」

「ああ、その事については俺を信用してくれ。

明日と明後日を休んだ事で彼女を元に戻せなくなる事は絶対にない」

「OK、じゃあ明日と明後日は休もう」

「ありがとう。」

あんたもゆっくり休み事だ」

「うん」

「じゃあ今日はそろそろ行くか。

あんたはコーヒーだけでいいのかい？」

「ああ、家に帰ってもし腹が減ったら何か食べるよ」

「そうかい、じゃあまた月曜日の朝、ここで落ち合おう」

「分かった。今日はありがとう」

「どういたしまして」

僕達は安住の優雅な笑顔に見送られて店を後にする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4211c/>

west sea side sunset

2010年10月10日02時54分発行